NEWSLETTER
保育・子育て総合研究機構だより
2010.12.1発行　NO.16
社団法人全国私立保育園連盟 保育・子育て総合研究機構研究企画委員会

見解　ニュージーランドの「保育評価」の考え方について

保育実践を高めるための試みとして、「園内研修をしてみませんか」と作成した『ワークブック１』(2008年７月）が、ここにきていろんな所から関心を呼んでいます。研修で使ってみて面白かったと、幼稚園の先生方も活用してくれたり、日本の研究者から諸外国の研究者に紹介してくださる方もあり、お陰で初版の在庫は底をつきそうです。

「保育の自己評価」が現場に課せられ、その対応を今求められている私たちですが、当然とはいえ自己評価は、評価の思想や哲学によってその方法も対象への視点の当て方もまったく違うものになってしまいます。そこで、限られた誌面ですが、『ワークブック１』で紹介したニュージーランド（以下、NZ）の「保育評価」の考え方について、改めて書いてみようと思います。

■「評価」のとらえ方の転換

「評価」というと、私たちはどうしても「できたか／できないか」「○か／×か」「正しいか／間違っているか」など、結果を評価する傾向があります。しかし、NZの幼児教育カリキュラムやその評価方法を開発した第一人者のマーガレット・カーは、成果主義の結果評価ではなく、成果は日々の保育の中にこそあるとして、学びをプロセス（みちすじ）で見ていくとしています。さらにカーは、子どもは「有能な学び手」であり、その子どもへの信頼を基礎に置いて、子どもと向き合う保育方法を提起しています。

具体的には、子どもの「学ぶ意欲」に保育者は関心を向け、その「学びの姿」を記録した「学びの物語＝ラーニング・ストーリー」を評価（子どもとの向き合い方をさぐる手立てを見出す）ツールとして開発したのです。これは、子どもの発達というのは、社会的・文化的・身体的・精神的・情緒的な特性が、分かつことなく絡み合っているもの（全人的＝ホリスティック）なのだから、学びも、例えば知的な側面だけを切り離して獲得させるのではなく、遊びや生活の中の脈絡と切り離さずに、学びをナラティブ（物語として）語り、統合的にとらえていくという考え方に由来しています。

「学びの物語記録」（数行のもの、イラスト、写真、ビデオなど記録方法はさまざま）は、録ることで、同僚と分かち合い・語り合う素材を提供することができるのです。この素材を担任だけでなく、みんなで分かち合うのですが、その価値は、多様な視点が得られるだけでなく、子どもの育ちの姿を同僚と共有し合える関係も得られ、クラスを越えたみんなで保育する関係も生み出されることにあるのです。分かち合いを通して、子どもの学びの意欲を支える手立てをみんなで確認し、次の保育につなげていくわけです。

■「学び」のとらえ方の発想を転換する

カーは、学びの「意欲」と「姿勢」を育むことが、保育・幼児教育の中心的な課題だと提起しています。この理論の土台としてカーが着目したといわれる、米国の教育心理学者、キャロル・ドウェックの興味深い研究があります。

ドウェックによると、誰でも赤ちゃんの頃は旺盛な学習意欲があるのに、３歳半くらいになるとチャレンジを恐れ、せっかくの学ぶチャンスに背を向けてしまう子どもが出てくる理由として、失敗に直面したとき、「無力感」を示す子どもと、学ぶことに「意欲」を示す子どもがいることを長年の研究で明らかにしました。

これはその中の１つの研究ですが、３歳半～５歳の子どもたちに、４種類のジグソーパズルを用意しました。最初の３つはピースが多くてむずかしいもの、４つ目は簡単なものです。パズルをさせた後に、子どもに「もう一度やりたいのはどれ？」と訊ねました。すると、４割近い子どもたちが、やったら解けるパズルを選びました。ドウェックは、簡単なパズルを選んだ

子どもたちを「無力感」を表現する子ども（結果志向型）、むずかしいほうを選択した子どもたちを「粘り強さ」を示す子ども（学習志向型）としました。

そして、「時間があるからもう１回やれるよ。どのパズルを選ぶ？」と再度子どもたちに聞いたところ、「無力感」を示す子どもの多くが３度目も同じやさしいパズルを選びました。一方、「学習志向」を示す子どもたちはできなかったパズルをもう一度と、挑戦することを選びました。理由を聞くと、できたパズルを選んだ子どもたちは「一番簡単だった」「やり方がわかっている」と答えました。他方、「学習志向」を示す子どもたちは「できるかどうかもう一度試してみたい」など、チャレンジしたい気持ちを理由にあげたのです。

■失敗は「悪いこと」？ できないのは「悪い子」？

この違いは、どうして生まれるのでしょうか？

研究では、子どもに自分自身と親に見立てた２体の人形を与えて、ロールプレイしてもらう実験を行っています。できなかったことを観ていた大人（の人形）が、子どもに何をいうか、また母親（の人形）が父親にその状況をどう報告するかを調べたのです。

すると「無力感」を示す子どもたちの半数は、「できなかったのだから罰を受ける」「お父さんに怒ってもらう」「自分の部屋に行って反省する」等、厳しい批判や罰を与える内容が多かったのです。一方、「学習志向」を示す子どもの大半は、「あなたは一所懸命に頑張った」「頑張ったけど、完成までにはならなかった。後でもう一度やりたいと思っている」等、励ましや努力したことをほめる言葉が多く見られたのです。

ところで「学ぶ」ということは、新しいことをもっと知りたい、自分も○○のようになりたいと、意欲をもってチャレンジしていくことですが、「失敗」は「悪いこと」、「間違える」のは「悪い子」なのだと考える子どもは、チャレンジを恐れ、学ぶチャンスを退けてしまうというのです。

■子どもが学ぶ姿に関心を向け、支える

カーは、こうした研究から子どもの「学びへの意欲」を支えることが重要だとして、保育者は子どもとの応答的・相互的な関係を通して、子どもの学びに気づき・認め・応えることで、「学ぶことを愛し、チャレンジを求め、努力に価値をおき、そして障害に直面しても粘り強く取り組む」「達成志向型」の子どもたちに育んでいくことの大切さを提起したのです。

NZ の幼児教育カリキュラム「テ・ファリキ」とセットで、評価事例集としてまとめられたものに『ケイ・トゥア・オ・テ・パエ』があります。これは NZ の原住民マオリの言葉で、「地平線を越えて」という意味ですが、「有能な学び手」である子どもは、私たち大人の社会や文化（私たちの地平線）を越えていく存在だとしてつけたタイトルだそうです。

地平線を越えていく力強さをもった学びの主人公である子どもを、大人は、支える／力づける役割を担うことで、次世代への責任を引き取ろうとしています。

＊参考文献
大宮勇雄・著『学びの物語の保育実践』（ひとなる書房）
鈴木佐喜子・著『乳幼児期の「かしこさ」とは何か』（大月書店）

（**鈴木眞廣**●千葉・和光保育園園長）

報告

諸外国の保育と対話しよう
日本の保育・子育てのグランドデザインへの一考として　その２（フィンランド）
―「出会い」と「かかわり合い」の多様性に見る豊かさ

★なぜ、「今」フィンランドとの対話？

「海外に出よといいたい。一定期間、日本を外から見ることは重要だ」

2010年ノーベル化学賞受賞者の根岸英一さん（米国・パデュー大学特別教授）は、日本の若者に向けてメッセージを送られました。メッセージには、海外に出ることは外国の事柄をコピーするためではなく日本を再考する機会になるよ、すなわち、日本の独自性を再発見すると同時に自分が世界にどのように貢献するのかを考え、実行することにつながるよ、海外のレンズを通して日本を見てごらんよ、という気持ちが含まれていることとして読みとれます。それは、本稿にお

いても同様です。子どもをめぐる世界の「今」と対話することからご自分の実践を振り返り、現場の「今」とこれからにいかす機会になれば、という趣旨です。さらに、実際に海外に出かけて街や実践をご自分の目で見る機会になれば、との思いもあります。

さて、「今」世界的視座で教育が語られる際、必ずといってよいほど取りあげられるのがフィンランドです。OECD（経済協力開発機構）のPISA（学習到達度調査）における「読解力・数学リテラシー・科学リテラシー」、それぞれの結果がここ数回にわたり上位であるゆえでしょう。上位を続けるカギは**「問題解決」「リテラシー（基礎基本教養）」「コミュニケーション」**のスキル（力）といわれています。とくに最近、保育分野に限らず企業においても、コミュニケーションスキルを身につければ何事も万事解決するような錯覚をもたらすセミナー等が賑わっています。果たして、園内や会社内コミュニケーションで十分なのでしょうか。

コミュニケーションが生まれる風土や環境がどのように構成され、育まれているのだろうか、との思いを抱いていたとき、今年８月、OMEP（世界幼児教育機構）第26回世界大会がスウェーデン（ヨーテボリ）で開催され、全私保連保育国際交流運営委員会の視察研修後、駆け足でしたがフィンランドの首都ヘルシンキを訪れる機会を持ちました。保育園内に限らず、街中でこうした力がどのように育まれているのだろうか？との思いを持って出かけました。

★子どもがさまざまな事象とコミュニケーションする「工夫（しかけ）」が施されている園生活

ヘルシンキの中心からバスで揺られて１時間弱、見渡す限り牧草地の中に訪問先の「Palvakoti Luonnossa kotonaan Sotkankoto（水鳥のおうち）保育園」がありました。ルソーとシュタイナーの教育哲学を踏まえつつ、１つの思想に偏らないように「自然の中で子どもは自ら課題を見出し、自然とともに育つ」ことが信条、と40歳代の女性園長は語りました。43名の２～６歳児を年少と年長の２グループ編成で展開している実践の特徴として園長がまず挙げたことは、生活の中で森に出かけることを含めて「大部分屋外（外遊び）」にいることでした。森の保育園として国内外から見学者が多く訪れるとのことでしたが、そうしたことより、保育理念（哲学）と実践の関係性をどうとらえ、具現化しているのか、ということに興味がありました。

お昼の前のゆったりとした歌やお話の時間

園長は、人間のルーツが森（自然）にあり、外で遊ぶことから、①自然の恵みと脅威を自分の体で感じてチャレンジし、課題を乗り越えていくこと、②体験から社会性となる思いやりや助け合う心、③不思議さから物語やファンタジーの世界を繰り広げる想像性と創造性、④事象に対する科学的な知的好奇心が旺盛になることをはじめ、生活の中にある学びにおけるプロセスの大切さを力説されました。また、フィンランドの家庭における子どもの生活もコンピュータゲームやＴＶ漬けになっており、一方的な情報やつくられた遊びに身を任せる、受動的で与えられたことをこなす子どもの生活に危機を覚える、との話もありました。

そうした園長の話の中や実際に子どもとともにある保育者の姿から気づいたことが、子どもが遊びや生活の中で「不思議だなあ」と感じた発見の瞬間を見逃さず、子どもの興味や関心に対して、時間をかけて子どもが自分の体で確かなものとして体験することに価値をおく問いかけという「工夫（しかけ）」、いい換えると問題提起の豊かさでした。例えば、保育者は、**「ねえ、こっちには何があるかしら？」**（森の探索において）、**「多いってどんなこと？」**（どんぐりを拾った数を子どもが比較している様子から）、**「なぜ、木に登るの？」**（木登りをすることに対して）、**「なぜ、ころころするのだろう？」**（森の木が落ちる様子から）という問いかけを行うということでした。

実際に森（といっても日本のような木々で鬱蒼としていない。岩盤と木々が見られる情景）の中で、子ども（５～６歳児）と保育者がかかわる様子を観ましたが、答えを求める質問というより、子どもと膝を突き合わせ、やさしい目を子どもに向けつつ、一緒に世界

の面白さを探究する科学者、協働者、仲間という雰囲気に溢れていました。そこには、コミュニケーションスキルを高めようとか、教養を高めようという意気込みは感じられず、今、このときを大切にしよう、ともに自然の恵みに感謝しつつ、楽しい面白いときをすごそう、という思いが伝わるような、ゆったりとした流れの中で穏やかで静かさのあるかかわり合いでした。

★人々が出会い、かかわる「工夫（しかけ）」が施されている街並み

コミュニケーションが豊かになる「工夫（しかけ）」のある生活は、街を歩いても十分感じ取れました。短い夏を堪能しようということもあるのでしょう、道端にはオープンカフェが並び、公園や道路でクラシック、ジャズ、大道芸人らのパーフォーマンスがあり、老若男女、障がいのある人も参加しています。

統計によると、フィンランド人のコーヒーとアイスクリーム消費量は世界一だそうで、映画『かもめ食堂』（小林聡美主演）で描かれたコーヒーに対する情熱の一シーンに納得！また、主人公がアニメの主題歌の歌詞をカフェで日本人女性（片桐はいり）に聴く場面がありますが、その舞台となっていたのが、ヘルシンキでも有名なアカデミア書店です。一歩足を踏み込むと、店内全体が見渡せる構造となって、本とそこにいる人が招いているように感じます。広くゆったりとしたカフェで、かかわり合う工夫がなされているのです。また、店員が本のことに詳しく、本がいつでもどこでも「ある」環境という風土がコミュニケーションの豊かさを織りなす媒介であることを実感しました。垣間見たフィンランドで人と人が多様に向き合うこと、誰とでも一人の人格をもった人間としてかかわり合うことの大切さを改めて思うときが与えられました。

★フィンランドの課題から考える：生活の中の光と影

さて、こう書くと、フィンランド礼賛に陥りやすいのですが、光があるところには影もあるのが常。街を歩いていて目に入ってきたのが“Tatoo（タトゥー）”の若者の多さ、一昔前流行した？黒い革ジャンに身を包み、喫煙している若者も見かけました。10月下旬、ソウルで開催された韓国教育学会でフィンランドの大学教授が、今フィンランドは、学校は好きだけど（ここがそもそも日本の今との温度差がある）、学習はイヤ！やりたくない！という生徒の難題に向き合っている、世界から称賛されている学校機関におけるプレッシャー（ストレス）が子どもたちに降りかかってくる日が来ないとはいえない、と話されていたのが印象に残りました。実際、糖尿病やアルコール依存症の人が多いのもフィンランドの影の社会的特徴でもあります。

今、日本社会、そして子どもをめぐる環境は揺らいでいます。保育・幼児教育において、環境を通して学ぶことの重要性が問われつつ、言葉のみが先行しているようにも思えます。単なる園内や勤務場所内におけるハウツウ（How to）スキル重視ではなく、「問題解決・リテラシー・コミュニケーション」をもたらす「問題提起・さまざまな表現を読み分かち合う意欲、環境（モノ・ヒト・コト）への働きかけ」という工夫を凝らした環境構成を保育園で展開したいものです。

子どもの知りたい、やってみたいという気持ちは世界共通でしょう。日本（それぞれの園）の風土をいかして工夫を凝らし、子どもの育ちたい心を十分に受けとめたいものです。

（**森 眞理**●東洋英和女学院・東洋英和幼稚園園長）

＊1頁・表紙タイトル中の写真
ヘルシンキの書店のディスプレイ（新学期始業時の子ども特集）

編集後記

◎時代に応えるシステムづくりの過程にこそ「新思考システム」を！

「新システム」論議が沸騰しています。ビジョンの大義は保育や育児を社会化しようとするもので、避けて通るべき事案ではないと確信しますが、国家自身の「保育」に対する認識が表層的で、新システムづくりの策定過程が昔ながらの手法のままで「現場主義のボトムアップ方式」にシフトされていないことから、産湯とともに赤子を流す状況になりつつあります。

森委員のフィンランド報告の中には、海外モデルは“日本の独自性を再発見する”ためにあるということが述べられています。また、“子どもに「問題解決力」を育む”ことが必要とするなら、私たち保育関係者は率先してモデルを示すべきでしょう。鈴木委員の原稿は「機構」としての見解でもあり、システムづくりの基本前提として必要不可欠です。まずは「子どもとは何か」「これからの保育」を各団体のトップが熱く語る日常を期待したいものです。

（**片山喜章**●横浜市・もみの木台保育園園長）

❖問合せ
社団法人全国私立保育園連盟
保育・子育て総合研究機構研究企画委員会
〒111-0051 東京都台東区蔵前4-11-10
TEL 03-3865-3880／ FAX 03-3865-3879
URL http://www.zenshihoren.or.jp
E-mail ans@zenshihoren.or.jp